○萬葉集のタチバナ（大井次三郎）Jisaburo OHWI: *Citrus* in 'Manyôshû'.

古事記の中に初めて橘（タチバナ）の名が出るのは伊邪那岐大神が筑紫の日向の橘小門の阿波岐原に到で坐して禊き祓ひたまうた記事ではあるが，此れはタチバナには關係のない單なる地名であるかも知れない。同書の中卷玉垣宮の段（垂仁天皇）の條にあるタチバナの記事は「天皇多遲麻毛理を常世國に遣してときじくのかくの木實を求めしめたまひき，故多遲麻毛理遂に其の國に到りて其の木實を採りて縵八縵矛八矛（カゲ）を將來つる間に天皇は既く崩りましぬ……其のときじくのかくの木實といふは今の橘也」である。日本書紀も大同小異であるが稍詳しく，天皇の九十年二月に命ぜられ九十九年七月に崩御，明春三月に歸朝したとある。古事記，書記の書かれた當時には九州當りにも既に食用のミカン類が入つて栽培されていたかも知れぬし，又十年の長きと云へば當時でも充分支那に往復出來た事であらうから牧野先生の御說の樣にコミカンの類であつたかも知れない。

萬葉集に現はれたタチバナの語は山本德太郎氏の御厚意によると長歌短歌合せて 66 ケ所あるが，一般にはハナタチバナの語が多く，その間で多少とも性質等を表はして參考になるのは 1489. 吾が屋前の花橘は散り過ぎて珠に貫くべく實になりにけり. 4111. の長歌の一部，田道間守（タジマモリ）常世に渡り八矛持り參來出し非時（トキジク）の香の木の實を……春されば孫枝萠（ツド）いつつ……五月には初花を枝に手折りて少女等に裏（コヤ）にも遣りみ白妙の袖にも扱入れ香細（カグ）はしみ揕きて枯らしみ熟ゆる實は玉に貫きつつ手に纏きて見れども飽かず秋づけば……成れるその實は直照りに彌見が欲しくみ雪降る多に到れば霜置けどもその葉も枯れず……この橘を非時の香の木實と名づけけられも，又 4266.……熟る橘髻華に指し……等の語であつて，此れ等を見ると食用にしたのではなくて花と果の香りのよい常綠の植物として珍重しているのであつて，今日のタチバナが萬葉の橘であつても差支へなさ相である。ダイダイも古くから栽培されたものらしく耐寒性も強いが，その熟果は玉に貫き手に纏き，又冠の飾りとするには少々大き過ぎる樣に思はれる。

若し想像が許されるならば田道間守が初め持歸つた食用のミカン類は大和では寒くて果實が出來ず，その間に天皇が崩御になられ，その樹も氣候が適さないのでいつしか枯れてしまつたが，それに似て丈夫な野生のタチバナといつのまにかすりかへられて栽培され，果を食べる事が忘れられて花や果の香りだけを賞美する樣になつたのではあるまいか。古事記，書紀では木の實であるが萬葉集では主として花タチバナであるのもそれを裏書きして居る樣に思はれる。

此の項を記すに當つて山本德太郎氏の御厚意に負ふ所が多く記して氏に深謝する。